

Title	ロシア語のヴォイス : 受身表現を中心に
Author(s)	人見, 友章
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61832">https://doi.org/10.18910/61832</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 人 見 友 章 )	
論文題名	ロシア語のヴォイス ——受身表現を中心に——
論文内容の要旨	
<p>本論は、人間とことばがどのように関係しているのかを世界の多くの言語で観察されるヴォイスという具体的な言語現象の中で考察している。特に、ヴォイスのなかでも典型的な体系とされる受身文に焦点をあてて、ロシア語における受身文の本質を明らかにしている。</p> <p>本論は、1970年にソヴィエト言語学においてヴォイスに代わる理論として新しく導入されたディアテシスの概念を基礎にして議論を進めている。具体的な考察の手順として、まずは、ヴォイスとディアテシスという二つの理論を先行研究に基づき整理している。次に、歴史的な観点から形態範疇としての受動態の起源、および受動分詞形の本来の意味・機能を概観し、いくつかの代表的な先行研究を挙げてロシア語の受身文とアスペクトの関係を論じている。そして、現代ロシア語の受身文を実際の言語資料を用いて分析している。本論において導き出された結論は、ロシア語の受身文は意味的な観点からしか規定できないということである。</p> <p>論文は、二部、六章の構成となっている。</p> <p>第Ⅰ部「序論」では、ヴォイスとディアテシスという二つの理論を先行研究に全面的に依拠して考察を行っている。さらには、研究の目的・方法、および論文の構成を述べている。</p> <p>第1章では、ヴォイスの基本的な考え方と普遍的な概念とされるディアテシスという新しい理論を先行研究に基づき整理している。そのなかで、ヴォイスを定義することの難しさ、能動態と受動態の対立が普遍的な事実ではないということを主張した。また、ディアテシスに関する考察において、受身文の普遍的特徴とは、能動文に特有の「主体—主語」の対応関係が壊され、主体が主語の位置を占めないような文であるとした。そのうえで、伝統的に「不定人称文」と呼ばれている構文が、フラコフスキーの定義に従えば、受身文に分類されることになるということ述べた。</p> <p>第2章では、研究の目的・方法、および論文の構成を述べている。</p> <p>第Ⅱ部「ロシア語の受身表現」では、ヴォイスの典型的な体系とされる受身文に焦点をあてて、ロシア語という具体的な言語の中で考察を行っている。</p> <p>第3章では、歴史的な観点から受動態の起源をまとめている。そのなかで、受動態の起源は中動態であること、受動分詞形も元々は状態指標から出発したものであり、ヴォイス・カテゴリーとは無関係な指標であったということ述べた。そして、ヴォイスという概念は、単なる能動態と受動態の対立として捉えるのではなく、能動態—中動態—受動態という連続線によって理解されるべきものであるということ主張した。</p> <p>第4章では、ロシア語の受身文に関する先行研究を概観している。これらの先行研究では、受身文とアスペクトとの相関性を中心に論じられてきた。そのなかで、分詞形受動文はパーフェクトとの非常に強い相関性をもつこと、現代ロシア語の分詞形受動文は受動分詞形の起源である状態指標を引き継いでいること、再帰形受動文は非限定反復、現実的持続、潜在的恒常性等の様々なアスペクトの意味をもつことの三点を述べた。</p> <p>第5章、第6章では、現代ロシア語の受身文のアスペクト的意味・機能を現実にある言語資料を分析することで検証している。ここでは具体的な言語資料にあたり、先行研究で指摘されている情報と実際の使用状況を比較することで、それらの一致点・相違点を観察している。</p> <p>第5章では、現代ロシア語の分詞形受動文について考察している。分詞形受動文の動作主項に注目すると、動作主項が出現する頻度は分詞形受動文全体の10%ほどで、その多くは事物名詞が使用されており、本来の意味での動作主として機能していないということが明らかになった。また、アスペクト別に頻度をとると、状態パーフェクトの使用が最も多く観察され、動作パーフェクト、アオリストの順に少なくなった。以上の事実から、分詞形受動文は現代ロシア語においても受身表現ではなく状態指標を示す形式として使用されると結論づけた。さらに、この章では、こ</p>	

れまでほとんど考察されてこなかったアオリスト機能をもつ分詞形受動文と同じ機能をもつ完了体他動詞不定人称文の差異化原理の解明も試みている。そのなかで、二つの構文の差異は「否応なしに」、「無理矢理に」、「一方的に」の意味が含意されるかどうかであるということを主張した。すなわち、明らかな傾向として、完了体他動詞不定人称文の述語動詞には動作対象名詞句の強制的な位置移動を表す動詞が多く使用され、そこには「否応なしに」、「無理矢理に」、「一方的に」の意味が含意され、外からの人為的な働きかけが非常に強い行為であるということが表現されるのに対して、アオリスト機能をもつ分詞形受動文にはそのような意味が観察されないのである。

第6章では、現代ロシア語の再帰形受動文について考察している。再帰形受動文の動作主項に注目すると、動作主項が出現する頻度は分詞形受動文の場合よりもさらに少なくなり、表示されたとしても事物名詞が頻度として多く、本来的な意味での動作主として機能していないということが明らかになった。また、再帰形受動文がヒト名詞の動作主項をもち純粋な受身用法として認定できるものは、全体のわずか約3%であった。以上の事実から、再帰形受動文は、現代ロシア語においても受身表現として機能していないと結論づけた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (人見 友章)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 言語文化研究科 教授 林田 理恵
	副 査 神戸市外国語大学 教授 岡本 崇男
	副 査 言語文化研究科 教授 堀川 智也
	副 査 言語文化研究科 教授 上原 順一
	副 査 言語文化研究科 准教授 横井 幸子
<b>論文審査の結果の要旨</b>	
<p>人見友章氏の博士論文「ロシア語のヴォイスー受身表現を中心にー」を合格と認める。          本博士論文は、受身文を中心とするヴォイス現象をロシア語という具体的な言語現象の中で考察したものである。</p> <p>まず、第1章で過去のヴォイス研究の系譜をたどり、特にフラコフスキーのディアテシス理論に依拠することで、伝統的に「不定人称文」、「無人称文」と呼ばれている構文の一部が、フラコフスキーの定義に従えば受身文に分類され得るという点を主張している。</p> <p>第2章で研究の目的・方法、論文の構成を述べたのち、第3章でこれまでの歴史文法書の記述をまとめ、受動態の起源としての中動態の存在、受動分詞形起源としての状態指標カテゴリーの存在に注目する。その事実に基づいて、ヴォイスという概念が単なる能動態と受動態の対立として捉えられるものではなく、能動態－中動態－受動態という連続線によって理解されるべきものであるとの見解を述べている。</p> <p>第4章でのロシア語受け身文に関する先行研究の概観を踏まえ、第5章、第6章でロシア語分詞形受動文・再帰形受動文について、豊富な言語資料に基づいた詳細な考察が行われている。</p> <p>第5章ではまず、分詞形受動文の動作主項に注目している。分析対象とされた642例の分詞形受動文のうち動作主項は約12%の文例にしか観察されないこと、またその多くが事物名詞であることが明らかにされ、先行研究ですでに指摘されている、分詞形受動文におけるパーフェクト機能の凌駕の事実を再確認する中で、現代ロシア語においても分詞形受動文の中心的機能は状態指標表示であると結論付けている。さらに、分詞形アオリスト受動文と完了体他動詞不定人称文の機能的差異の分析が試みられている。これまでの研究では、この両構文についてその差異化原理が明らかになっておらず、単なる文体的差異という言及のみがなされてきた。人見論文では、「外からの人為的な働きかけ」を強調する場合に、不定人称文が使用される傾向があることが論証されている。付け加えて、アオリスト受動文によるテクストレベルでの結束性維持や主題交替機能に関しても明らかにされている。これらの考察はロシア語ヴォイス研究において新たな事実を論証したものとして高く評価される。</p> <p>第6章のロシア語再帰形受動文分析では、動作主項表示がほとんど観察されない、使用動機として「意志性排除」というファクターが強く関与している、多くがモダリティー表現として使用される といった点が明らかにされ、ロシア語において再帰形受動文は受動カテゴリーを未だ形成していないという結論が導かれている。</p> <p>各章の議論の進め方、論理の展開はスムーズであり、先行研究の綿密な検討、詳細なデータ観</p>	

察に基づいた理論展開は手堅く、的確にまとめられている。先行研究が少なく、言語学の中でもその解明がとりわけ難しいとされてきた問題に正面から取り組んだ点は大いに評価に値する。

審査委員からは、1) 先行研究の内容に対する筆者の評価が表層的であり、またその成果がどのように本論文の中で継承発展されているのか、記述に具体性が求められる、2) 古代ロシア語のヴォイスに関する論考や実例の検討がなく、ヴォイスの歴史的変遷の分析としては不十分である、3) 発話行為において「複数表現形式からの選択」というプロセスは果たして成立しているのか、その点に関する考察が物足りない、4) 受動文使用のジャンルによる頻度差に関する記述が必要、5) ロシア語の学習指導面で本論文が貢献できる点についての具体的言及が欲しい といった意見、疑問点が出された。これらの諸点は、論文そのものの価値を大きく損なうものではなく、本博士論文を今後発展させるための課題として明記されるべきものであろう。

以上のことから、本審査委員会は全員一致で人見友章氏の博士論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。